

東南アジアにおける民族服の研究 (第4報)

北部タイ山地民族 ヤオ族の衣裳

柴村恵子・村瀬史子

Studies on Folk Costumes of Northeast Asia (IV) The Costumes of the Yao Hill Tribes of Northern Thailand

K. SHIBAMURA and F. MURASE

緒 言

東南アジアの大陸部、特に中国南部及び西南部からインドシナ半島に至る地域には、伝統文化を異にする数多くの少数民族が入り交じって分布している。このうち北部タイの山岳地帯にはメオ族、ヤオ族をはじめ10種族余りの山地民族が住んでおり、民族学や民族衣裳しやうを研究する者にとっては極めて興味深い問題や資料が山積している。この地域に住む種族は特有の生活様式、風俗習慣を持ち、独自の衣裳を着用している。筆者らはかねてから、これら少数民族の衣裳に興味を持ち現地調査を計画していたが、1980年にたまたまタイ・スズキ自動車株式会社の援助により北部タイのチェンマイ及びその周辺の山地民族について調査を行う機会を得た。その後1982年12月下旬にチェンマイ、チェンライ地方を中心にしてメオ族、ヤオ族、カレン族、ラフ族、アカ族、リス族などについて現地調査を行った。このうちアカ族とメオ族についてはすでに報告した(名古屋女子大学紀要27号, 28号)。今回は1984年12月下旬から1985年1月初めにかけてヤオ族を中心として、その周辺の種族について調査を行った。ヤオ族はメオ族とともに、この地方の山地民族の中では有力な種族の一つで、政治的にも経済的にも他種族に比べて主導的な地位を占めている。彼らの生活や文化などについては白鳥芳郎氏⁵⁾が、また、竹村卓二氏^{10),14)}はその歴史と文化について詳細に報告している。この他ヤオ族に関する民族学的な報文や資料は多い。また、衣裳に関しては量 博満氏⁵⁾及び松本敏子⁸⁾、カノミタカコ^{9),11)}、野口文子¹⁵⁾など、各氏の報告があるが、形態面や服飾についての詳しい報文は少ない。

そこで筆者らは今回の現地における調査結果をもとにし、次に示した機関で得た資料及び文献を併せて参考にし、考察を行ったのでそれについて報告する。

調査及び資料

1. 調 査

1984年12月下旬から1985年1月初めにかけて、タイ人及びヤオ族とリス族の言葉も話せるアカ族出身の案内人の協力により現地調査を行った。今回は特にバン・パードゥアとバン・ノンウェンに住むヤオ族に主力をおき、併せて他の種族について、彼らの住居を訪れ、写真撮影及び生活状況や衣裳についての聞き取り調査を行った。また若干の衣裳を購入し、帰国後、更に写真撮影と採寸を行った。なお考察にあたっては、1980年及び1982年の調査結果も併せて資

料として用いた。

2. 研究機関及び資料

チェンマイ大学山岳民族研究所，国立民族学博物館，人間博物館リトルワールドに所蔵されている資料並びに末尾に掲げた文献。

結果及び考察

1. ヤオ族の概要

我々が民族衣裳を研究する場合，それが培われてきた背景となっている民族の歴史や風俗習慣をぬきにして解明することは困難である。そこで，衣裳について述べるに先立ち，筆者らが現地調査と文献資料等で得た知見を整理し，ヤオ族の歴史及び生活の概要について触れておく。

(1) 歴史と分布

ヤオ族は他の少数民族に比べ，一種独特の信仰を持っており，祖先は犬であったと伝えられ，犬をあがめ尊ぶ習慣がある。竹村氏の犬祖説話(1984年第75回民博ゼミナール)によると，ヤオ族には2千年もの長期にわたって連綿と語りつがれている「槃瓠説話」というものがある。それによると北部タイ・山地民族の発祥の地といわれる中国は，およそ3～4千年前までは少数民族国家であったが，その後，漢民族国家となり，現在では漢民族がその多くを占めている。中国の少数民族は現在55種族といわれ，そのうち30種余りが揚子江以南の華南地方に分布している。その中でヤオ族は中国大陸のほとんどの地域に点在しているが，華南地方から東インドシナ半島にかけて，その多くが山間をぬって分布している。また，村松一弥氏²⁾はそのヤオ族はすでに宗の時代に山猿^{やお}と呼ばれ，もっぱら山中に住み，漢字で書かれた槃瓠犬祖説話をともなう系譜文書(特許状)，つまり漢民族の支配者から得たお墨付きを奉じて山地を歩くことにより，お互いにどんなに遠く離れて分散生活をしていても，彼らはお互い一貫した生き方と文化を保ち続けることができる集団であると述べている。これらのことからヤオ族は中国の風俗習慣の伝統が色濃く残っている種族といえる。一般に少数民族は，自らの文字文化を持たないものが多いが，ヤオ族は漢字を使い，中国語の方言を話す人もいるといわれる。しかし，一方漢民族と違って独特の民族伝説や，原始的な精霊信仰など固有の文化も持っている。

彼らはかつては中国揚子江南部一帯にその多くが分布していたが，その後漢民族の迫害や，旱魃，凶作などにより次第に南下し，現在ではビルマ，ラオス，ベトナム，タイなどに広く住むようになった。タイへは1910～1950年頃にかけてビルマ，ラオスを経て移動してきたといわれ，北部タイのチェンマイ，チェンライ，ランパング，メーホーングソン，ナン地方の山岳地帯にその多くが住んでいる。竹村氏¹⁴⁾によると中国華南地方から東インドシナ半島にかけて分布しているヤオ族の総人口は約100万人といわれており，タイでは北部タイを中心に約2万人が住んでいると推定されるとある。彼らは国籍を持たず，焼畑耕作を営み，数年ごとに移動するため，実際に正確な人口を把握することは困難である。

(2) 生活と習俗

1) 住居……彼らが村を作る場合には，海拔900～1200mの山岳地帯を選び，1つの村は15戸くらいを単位として構成され，耕作や家畜の飼育に必要な広さと天然の水の供給があり，近くに森林地帯があることを条件としている。ヤオ族の家を訪れてまず感じるのは母屋と穀物蔵と家畜小屋を必ず持っていることである(写真1)。各家は規模に大，小の差はあっても内部の構造は同じである。彼らの村は山岳地帯にあるため一方は山，その反対側は谷である。家の間取りは入口を入れて山手側が寝室，谷側が土間になっており，そこは更に区切られていて，

村の中心を通る道路側，つまり村の内側には，男の間，客間があり，外側が女の間で台所も兼ねている。男の間の谷側には大門があって，神様の出入りする門とされている。これは結婚式や葬式，その他重要な宗教儀礼時のみに用いられるという。家の構造はメオ族，リス族などと同様に平土間式であり，寝室のみが高床式である。それは約50cmの高さで，ベッドくらいの広さの寝るだけの小部屋にいく



写真1 ヤオ族の住居

つも区切られている。この寝室の床には竹や板がしかれている。仕切り壁には竹を編んだものもあるが，多くの場合板が用いられている。寝室その他に竹を用いていることは，材料が手軽に得られることと，当地の気候が比較的高温であるため，空気の流通をよくし，一方床はクッションの役割も果たす利点があるからであろう。家の他の土間は日常生活のすべてに，つまり多目的に用いられ，男の間は主に接客用として神棚も作られており守護神がまつられている。家の広さは約10m四方で1戸当り普通8人くらいが住んでいる。

2) 食生活……食生活はメオ族などと同様，焼畑農業による自給自足である。主食は米であるが，それはうるち米で，副食としては野菜類，即ちさつまいも，かぼちゃ，とうがんなどをトウガラシと塩で味付けしたものを主として食しているようである⁹⁾。彼らの食事は1日3回とるのが普通であるが，少量の副食で多量の米飯を食べる傾向にある。これは他の食物に比較して入手しやすく，また長年の習慣によるものであろう。また，彼らは豚や鶏を飼っているが，これは日常の食卓にはめったにのぼらない。儀礼の時のいけにえとして供物に用いたり，その時のごちそうの材料となる。なお，豚肉の料理では，日本の豆腐に類似したものをバナナの葉と一緒に包んで蒸し焼きにしたりして食べる。

彼らの経済生活の基盤は焼畑耕作とそれに付随する家畜の飼育にあるといわれるが，この他，最近では若干の手工業に付随する商業活動(刺繡しゅうをした衣類や手工芸品を観光客や平地商人へ販売)があげられるが，何といたっても収入源の最も大きなものはアヘンである。また男性は20才頃からこれを吸い，女性の常飲者も少なくないようである。筆者らが訪れた村々でもそのような光景を何回か見かけた。これらを防ぐため，タイ政府は1958年にケン栽培禁止令を出し，それに代わる養蚕等の奨励を行っているが，ケンに代わる程の生産性はなく，そのまま見逃されているのが現状のようである。

3) 習俗・儀礼……山地民族の生活は信仰を中心として展開されているように思う。ヤオ族の場合も生活と精霊崇拜が密接につながっており，それに伴う儀礼が重要なものであることを各所で見聞した。山地民族のもつ儀礼はどの種族もその種類は多いが，ヤオ族は種祖神である槃瓠と称する神をはじめ，焼畑耕作など，自然に生きる人々にとって森羅万象に宿るとする精霊に対する強い信仰心があり，これに関する数多くの儀礼が行われる¹²⁾。その代表的な儀礼の1つが結婚式である。彼らの結婚も他の山地民族と同様，婚前交渉が行われ，その後で男性は仲人を頼み娘の両親に交渉する。この場合，多量の銀を贈る習慣がある。昔は行李こおり一杯くらい

の銀の棒を嫁方に届けたといわれているが、今日ではタイバーツでもよいとされているようである。嫁を迎えるというのは労働力をもらうことになり、その生涯の労働力をつぐなうだけの銀を嫁の家へ贈るといった習慣が今もなお続いている。したがって、経済力のない青年は嫁の実家に住み込んで労働奉仕をし、数年後お金がある程度できると自分の村に帰り改めて村民を招いて、正式な結婚式をあげる者もいるという。なお、周辺の異種族との結婚は精霊が違うということから、儀礼的にはほとんど認められていない。しかし、「買い子」という習慣があり、乳幼児の時から育て、労働力として使い、成人するとヤオ族と結婚させることはある。この「買い子」に関係のあるラフ族やアカ族などの立場からは、自分たちよりも金持ちであり、且つ、山の主人公とされているヤオ族に子供を預け養育してもらうことは、子供の幸せにつながるのと考えから「売り子」に出すこともあるという^{5),12)}。21世紀を迎えようとする今日、今なお世界の片隅でこのような人身売買が行われているということは驚くべきことである。

彼らにとっては葬式も重要な儀礼の一つである。これは3～5日間にわたって行われる。日本の場合と同様、体を洗い、棺におさめ、土葬か火葬のいずれかにするのであるが、これは村から遠く離れた所で行われる。葬式は不幸が続いておこらないように死者が家の中で死んだ場合には家の中で、外で死んだ場合には外で行われる²⁰⁾。その儀式をとり行うのは呪術師であって唯一の司祭者である。この司祭者は、冠婚葬祭などすべての儀礼に必ず特殊な衣裳をつけ主役をつとめる。その他、病気の時にも呪術師が特別な儀礼を行うが、呪術師の祈禱^{とう}に対して、精霊がそれを聞き入れず、病気が回復しない時に初めて現代医薬を試験的に使う²⁰⁾という。このように、彼らは呪術師に対して、絶対的な信頼感を持ち、最も偉大な権威者として尊敬している。

2. 衣 裳

北部タイの山岳地帯には、既に述べたように10数種の山地民族が分布しており、いずれの種族も固有の衣裳を身にまとっている。それは各種族が長い年月の間、文化遺産として大切に培ってきたものである。特に女性の場合それが顕著であり、他の種族からの影響はほとんど認められない。したがって、遠くからでも一目でそれは何族かを判別できるほどはっきりとした違いがみられる。これは彼らにとって種族を堅持する大切なあかしでもある。しかし、男性の衣裳は多くの種族において、平地民との交流などにより早い速度で平地民化しつつある。これに対して女性の場合は、固有の衣裳に固執しているものが多い。

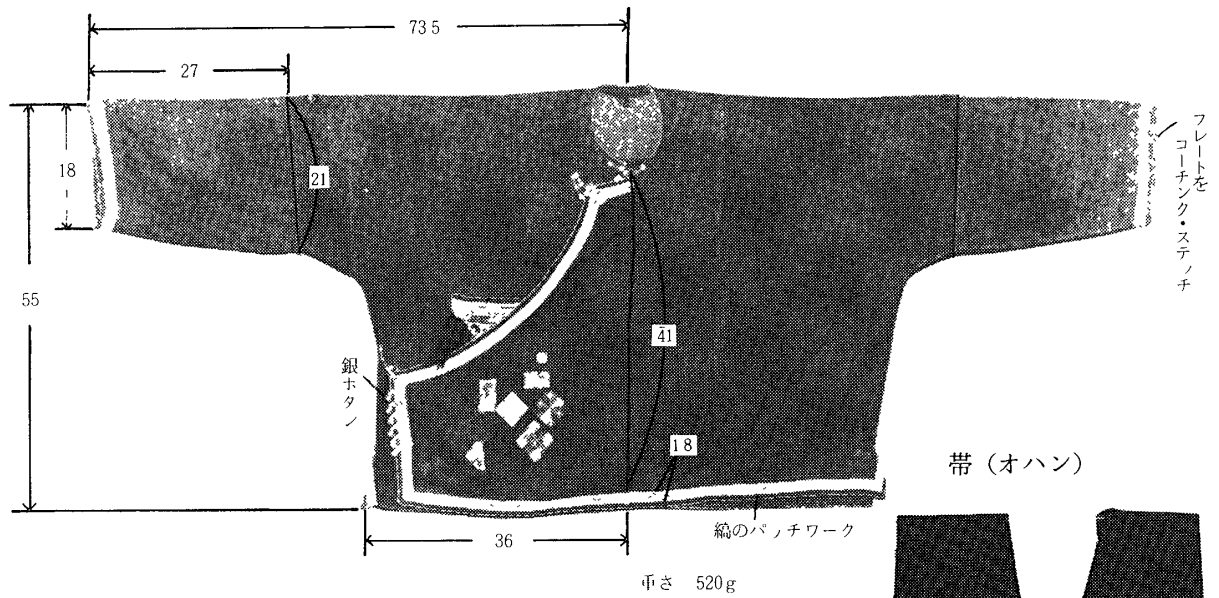
(1) 男性の衣裳

ヤオ族の男性の伝統的な衣裳は写真2及び図1に示すようなゆったりとした“ルイ”と呼ばれる上衣と“フォウ”と呼ばれるズボンの組み合わせで、ルイは刺繍の施されたアンバランスの深い打合いである。そのルイには打合いから裾^{すそ}にかけて1.8cm幅の中に7本(白赤白黒白赤白)の縞のパッチワークをはめ込み、下前には刺繍をしたポケット(幅15cm×深さ20cmの五角形)がつけられている。それに両端に刺繍をした“オハン”という帯をしめ、その上か

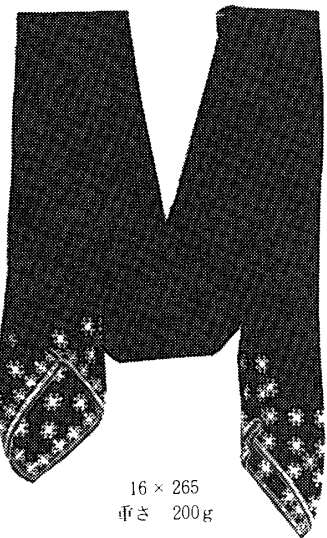


写真2 ヤオ族の父娘

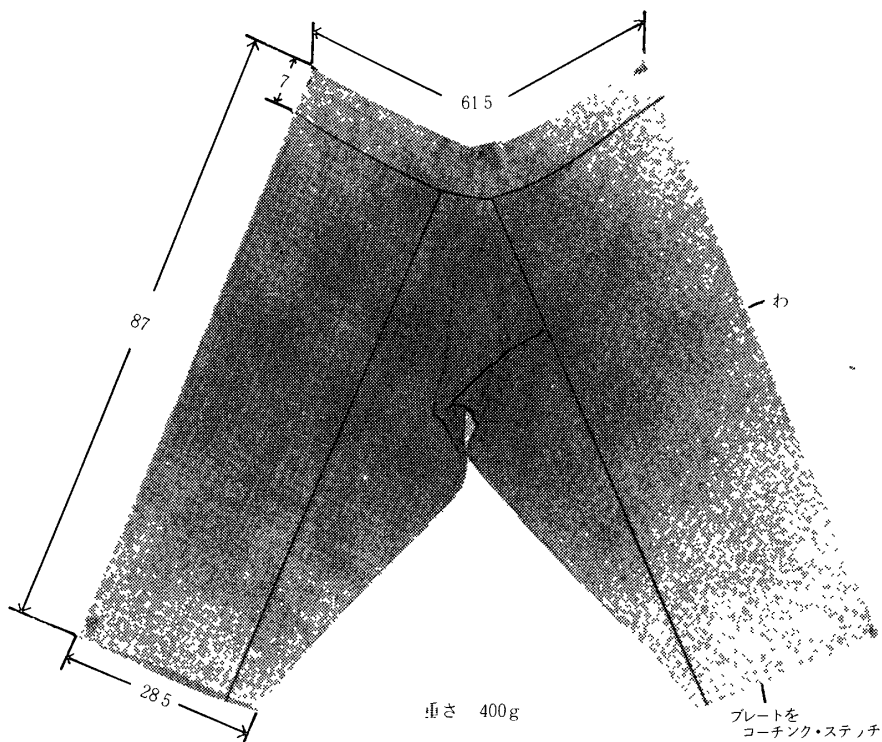
上 衣 (ルイ)



帯 (オハン)



下 衣 (フォウ)



	上衣	下衣
厚さ mm	0.85	0.85
密度 タテヨコ 本/cm	14	13
	14	13

図 1 男性の衣裳 (単位: cm)

らベルトをしめる。フォウには前後がなく内股には大きな^{まち}襠布が入り動作しやすくなっているが左右対称ではなく、この構成法は大変興味深いものである。

以上がヤオ族の男性本来の衣服であるが、近年になって彼らの風俗習慣や民族衣裳も平地民と同化する傾向がみられ、特に男性の服装に強く認められる。それは本来しめるべき帯を省いたり、また上衣・下衣ともに平地から購入したシャツにズボン姿、あるいは上衣をシャツスタイルにし、下衣は種族独自のズボンを組み合わせたり、またその逆にするなどその着方は多様化しつつある。筆者らが調査に訪れた時には男性は仕事に出かけている時間帯であったためか、少数の村人を見かけたにすぎなかったが、いずれの村においても上衣・下衣のいずれかを平地から入手したものを着用している者が多かった。

(2) 女性の衣裳

女性の服装は写真2に示すようなガウン風のゆったりしたふくらはぎ丈の上衣にルーズなズボン、頭には大きな“モア”というターバン姿である。

1) 上衣(ルイ)……上衣は図2で示したような寸法で構成され、形の特徴は大きな身頃に小さな袖^{そで}が付き、その袖下・袖付位置に角形の襠が付けられていて袖付けの小ささを補っている。また袖丈が比較的短いのは作業をしやすくするものと思われる。なお、裾から約70cmの間は両脇を縫い残し、スリットになっていて、明き止まりには赤い毛糸の房がほつれ止めを兼ねて付けられている。この両脇のスリットは後で述べる独特な着装法になる。

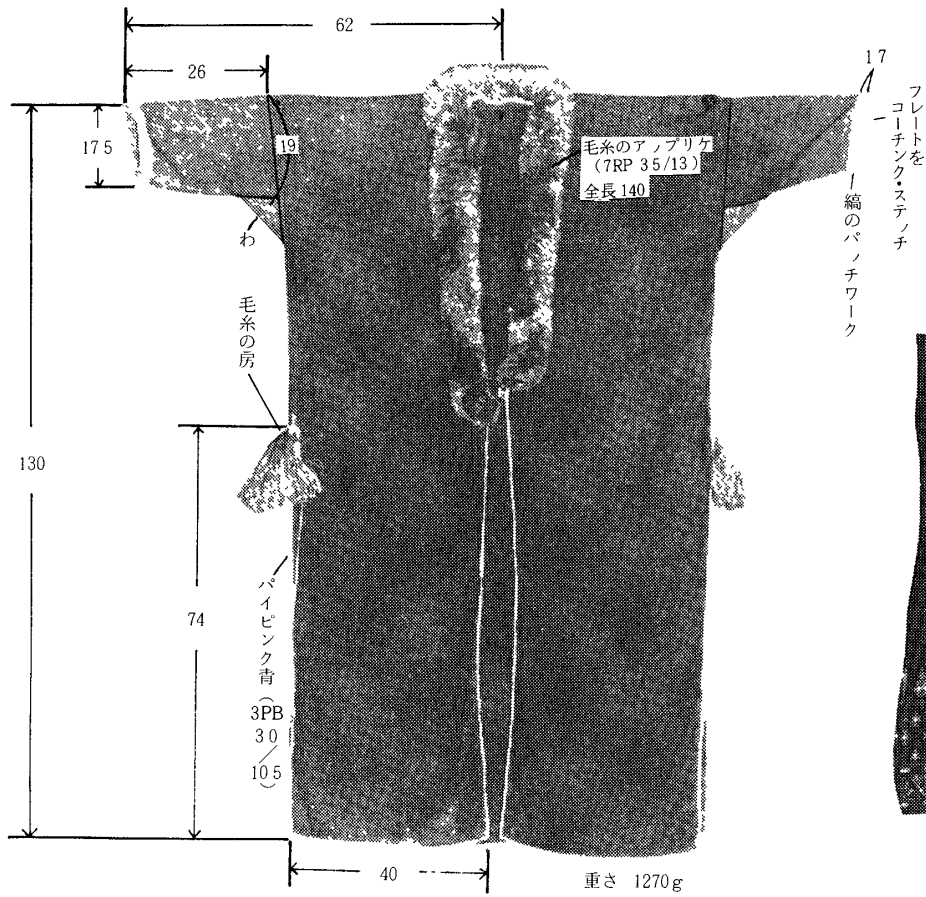
いま一つの大きな特徴は^{えり}衿ぐりに付けられているストール風の装飾である。それは一見毛皮のようであるが、赤色の毛糸のボンボンを70数個びっしりと並べ、モール状にアップリケしたものを衿ぐりにとじ付けたものである。藍染めの上衣につけられたこの赤色のモール状のトリミングは、色彩的にいかにも対照的で、ヤオ族の女性の衣裳を特色づけている。このトリミングのつけ根には、ヤオ族の刺繍の代表ともいえるクロス・ステッチが施され、毛糸でかくれて見えない部分であるにもかかわらず、丹念に手が加えられている。

着装法は写真2のように右身を上にして打合わせ(時には逆の人もみかける)、前身の裾は両脇のスリットを利用して後にまわしてまとめ、その上から広く長い帯を結んで両端はしごき帯のように結んで垂らす。したがって下にはいている刺繍を施したズボンの前面のみ、のぞいてみえることになり、後面は上衣でおおわれている。なお、腰に巻く帯はヤオ族の布幅の約50cm、長さは5～6mもあるもので、その両端にはクロス・ステッチやホルペイン・ステッチ風の刺繍が25cmくらいの丈に刺されている。

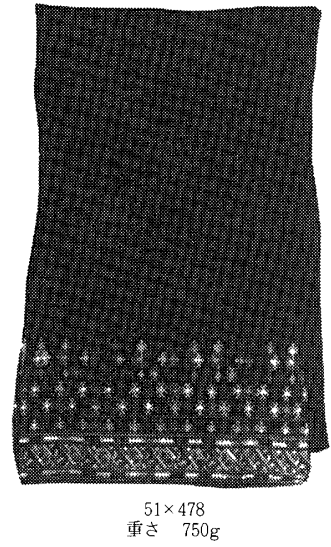
竹村氏¹⁴⁾はヤオ族の女性の衣裳について、衿のトリミングが伝統的なものにしてはあまりにもファッションブルに見えるため、調べてみたところ、それは20世紀後半以後に取り入れられ、しかも短期間のうちに普及したものであることが、現地の人々の記憶から推定されるに至ったと述べている。たしかにファッションブルで、アカ族など他の種族に比べ、特に上衣については伝統的な味わいが薄く感じられる。なぜこのように変化したのか、筆者らも不思議に思い調べているが、今のところヤオ族の発祥の地である中国のヤオ族にも同じ装飾は見られないので、どのような経路を経て、また、何の影響を受けて変化してきたかについての手がかりは、現在のところつかめていない。しかし、このことはヤオ族の被服文化の変遷を見る上で大切なポイントである。

2) 下衣(フォウ)……下衣はルーズなガウチョ風のズボン形式であり、寸法は図2に示すように丈が約75cmで、着装時には上衣の丈とほぼ同じになる。構成は男性のものと同様細腰位置で8cm幅の接ぎ布がベルト状に入り、また内股には大きな三角形の襠布が前後に各々

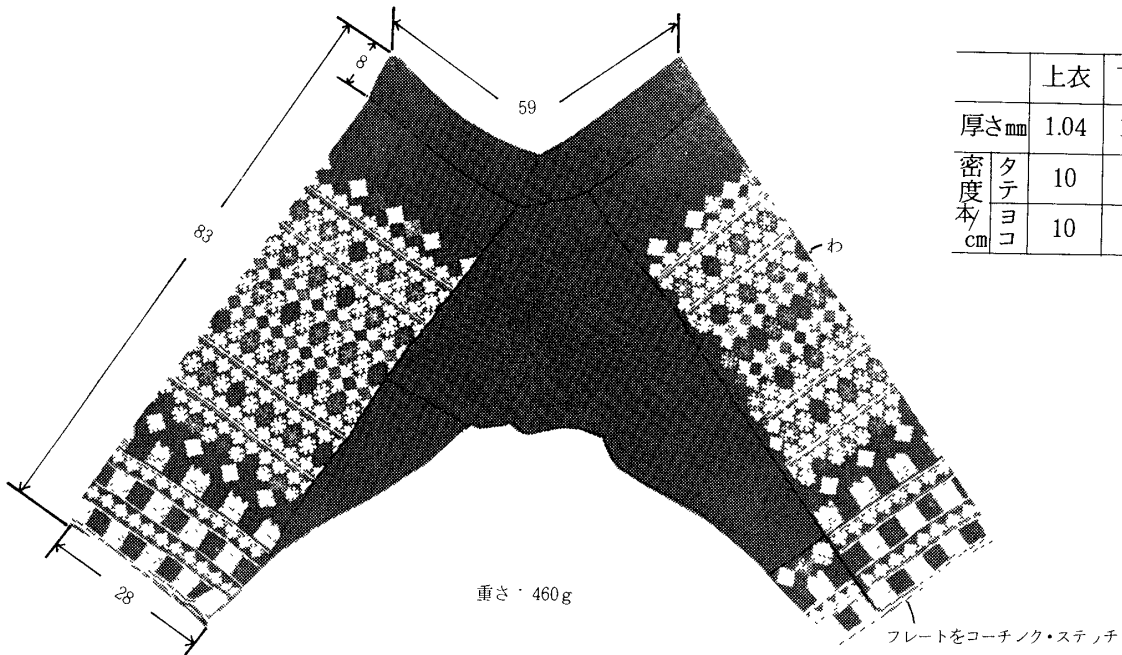
上 衣 (レイ)



帯 (オハン)



下 衣 (フォウ)



	上衣	下衣
厚さmm	1.04	1.01
密度 タテ ヨコ cm	10	12
	10	11

図 2 女性の衣裳 (単位: cm)

入っていて動作しやすくなっている。ズボンには前後の区別がなく、男女の差は図1、2のように刺繍のある、なしが大きな違いである。彼らには物さしがなく、人体寸法で計っているので、寸法は同じとり方をしていても人により多少異なるが、裁断は直線裁ちで、両ズボンとも、布幅、布量に合わせて裆布に接ぎを入れたりして合理的に裁たれている。自給自足の農耕生活による労働から生まれた開脚などの動作量も加味された実に無駄のない寸法であり裁断法である。構成では裆布に接ぎ線が入るが、左右対称ではなく、接ぎ線が重ならないよう組み立てられ興味深いものである。この構成には左右がなく、前後もないので、同じ所のみが損傷することもなく着用できるという生活から生まれた知恵とでもいえる高度な構成法ではないかと考えられる。

このように形態には男女の差はみられないが、女性のズボンには脇布全体に気が遠くなるようなち密な刺繍がされている。それは幾何学的な模様であり、木綿の紺地に色鮮やかに浮かび出っていて、モダンとシックが交錯した最高の手工芸品である。この作品に接した時、何人といえども驚嘆しない者はないと思われるほど、芸術的価値に富む衣裳である。しかし、その一方、縫製は30番くらいの太い木綿糸で1cmの間に2～3針で不ぞろいの荒い縫目で縫合されている。縫製は耳の所は平縫いか返し縫い、裁ち目は折り伏せ縫い、あるいは折り伏せまつりが施されている。加藤定子氏の報告(第3回国際服飾学会)では平縫いの方法は、中央アジアの地域に多く見られる方法であるといわれるが、このことから、この種族の源流が中国方面であるということが裏付けられる。

3) かぶりもの……ヤオ族やアカ族にとって頭は精霊が宿っているところとされ、帽子やターバンについては特殊な考え方を持っている。つまり彼らは、帽子やターバンは悪霊が入らないようにということから寝る時もとらない習わしがあり、ヤオ族もどんな場合にもとらないとの説は多い。しかし今回の調査では、寝る時にはこれはずして枕にすると聞いた。また、筆者らがそのターバンのすばらしさをほめたところ、その場ではずしてみせてくれたことから、時代の推移による大きな変化がここにも現れていることを知らされた。なお、ターバンの巻き方は、幅約50cm、長さ約3mの布を、幅の方を4つ折りにして、刺繍のある端の部分を角のように立て、全部巻きつけ、最後の端をはさみ込んで立てる方法と、刺繍が見えるように巻き、はさみ込んでしまう方法とがあるが、今回調査した村では、後者の巻き方であった。

4) 着装……先にも触れたごとく山地民族の多くはそれぞれ特有の衣裳を季節にかかわらず年中着用している。カレン族の女性のように、未婚、既婚の別により衣裳の変わる種族もあるが、ヤオ族をはじめ多くの種族は基本的にはそれは変わらない。子供服においても、ただサイズを小さくするのみで、帽子だけが変換することが多い。また、晴れ着、仕事着、休養着の区別もない。しかし、白メオ族の女性のように、儀礼には、日常用のズボンスタイルから白無地の細かいプリーツ・スカートに変える種族もあるが、ヤオ族は老若を問わず同じスタイルである。この北部タイ地方は熱帯性サバンナ気候で、最寒月でも平均気温が18℃以上、最暖月には30℃以上にもなる¹³⁾。その中で彼らは、年中、素肌に民族服をまとっているのが一般的であるが、朝・晩の寒い時には、上衣の下に平地で購入したブラウスを着ている姿を、また、アカ族やメオ族などは身幅の関係があるためか、上衣の上にカーディガンなどをはおっているのを今回の現地調査では幾度も見かけた。しかし、彼女たちの多くは伝統を守り、山中で野良仕事などの重労働をするときでも、先祖伝来の民族服を身につけている。それは上衣・下衣・帯・ターバンを含めると3kg近くにもなる。腰回りは太く、ゆったりとした上衣にズボン、ずっしりと重そうなターバンをして堂々とした姿である。この姿は雨期のじめじめした季節には決して着

地の良い衣服とは思えないが、このように今もなお多くの人たちが伝統文化をかたくなに守り続けている点、少数民族の特色の一つといえよう。

なお、彼女たちの装飾には銀が多く用いられ、日常の農作業にもそれをつけているが、祭りや儀礼には豪華なエプロンをし、装飾をぐっと増して重くなるほど身につけるが、衣裳は儀礼の時にも基本的には変わらない。

(3) 生地

衣裳の生地は従来は自家生産のものを用いていたようであるが、近年では平地からの購入に頼るものが多くなった。特にこの種族ではその傾向が顕著のようである。

生地は一般に木綿が多いが、最近では平地から購入した光沢のある厚手の化繊も用いるようになった。以前は麻を栽培し機織りもし、その技法は生活全体の中できわめて重要なものとされ、幼い頃からその技法を学び、それが女性の大切な仕事の一つとされていた。布の厚さは厚手のもので1 mm 前後から、薄手のものでもおよそ0.5 mm である。密度は約10~14本/cm である。

しかし、布地の染めは現在でも各家で行うため、軒先や台所に藍瓶が置かれ、村の中に染めた布が各所に干されている。

(4) 刺繍

ヤオ族の衣裳で他の種族に比べて最大の特色は細かい刺繍である。その刺繍は一般にはクロス・ステッチが主であるといわれているが、実際にこの種族を代表するズボンの刺繍を見るとホルベイン・ステッチの手法が最も多く、その他、クロス・ステッチやアウトライン・ステッチの手法が使われている。しかし、実際に刺してみると筆者自身完全なホルベイン・ステッチと断定するには今一歩ほり下げた調査が必要である。図案は幾何学的であるが、何を現わしているかを尋ねると、それは、人、虎の顔、花、星、のこぎりの歯などである。彼女らをとりまく自然界や日常生活の身近に見られる題材を図案化したものようである。その図案は約100種類以上あるといわれ、村によってその柄の組み合わせや刺繍糸の色合いに特色があると J.S. Uberoi 氏²¹⁾は述べている。図案の刺し方は、人、花、星などはホルベイン・ステッチ風の刺し方が、虎の顔、のこぎりの歯といわれるものにはクロス・ステッチの手法が用いられている。その他、日本のこぎん刺しに似た図案や刺し方の部分もズボンにおいては多く見られる。日本の東北の刺し子の場合も補強として刺されていたものが次第に長寿・福寿を願う意図が入って刺されるようになったが、ヤオ族の刺繍においても同様の願いや呪術的願いがこめられているようである。量氏⁵⁾は刺繍に白糸が多く用いられているのはメーサロン地方、黄色系の多いのはチェンカム地方のヤオ族のものであると述べている。その他女性のズボンの裾、帯やターバンの端、また、男性の上衣の打合い、裾、袖口には3つ折り始末をした折り山に装飾と補強を兼ねたと考えられる直径0.2~0.3 cm のブレードや、銀を巻いたブレードをコーチングの手法で止めている。刺繍に用いられている糸の色は赤、黄、緑、青、紫系の濃淡、白、黒などが多いが、今回の調査で組み合わせに多く用いられていた色は、赤(7 R P 3.5 / 13)、黄(2 Y 8.5 / 10)、緑(3 G 4.0 / 8)、青(6 P B 3.0 / 10.5)、白、黒などである。また一着の服に用いられている色数は5~7色くらいが多く、それ以上多色を用いることはまれのようである。刺繍はヤオ族の女性が最も精根こめて技術を競うもので1年の歳月を要するものもあるというが、多くの山地民族の女性にとって刺繍が上手なことは、よい妻になるための重要な条件である。したがって、女性は幼い頃から親にその技法を教わり、10才ともなるとむずかしい図案でも刺し得るようになる。また、男性は妻を選ぶ条件として、刺繍によって性格を判断し、結婚の相手

を選ぶという。山地民族の女性はその種族もよく働くが、アカ族の女性も朝市などで物を売りながら、また、歩きながらも暇をみて糸を紡いだり刺繍をしている。ヤオ族の場合も若い女性が刺繍をしている姿をよく見かけたが、特に印象に残ったのは老婆が軒先で低いスツールに腰をかけ、眼鏡をかけて刺している姿を度々見かけたことである(写真3)。その様子を見ると下絵が書かれているわけでもなく、また織糸を数えている様子もないのに規則的に、しかもきれいに刺していく。日本では表側から見て刺していく刺繍を彼女たちは裏側から刺す人が多いので、不思議に思って尋ねてみたところ、この方がきれいに刺せるという答えが返ってきた。彼女らにとって特別の理由はないようである。それは我々が表から見て刺すものと思っただけと同様に彼女たちは裏から刺すことを習慣づけられたものであろう。



写真3 刺繡をする老婆

結 語

この度、北部タイ山地民族のヤオ族の衣裳について現地調査を行ったが、その独特の民族衣裳の構成や着装など、興味ある問題について知見を深めることができた。更に、その衣服文化を支えてきたヤオ族の生活・習俗にも触れることができ、感銘深いものがある。

ヤオ族をはじめ山地民族は、焼畑耕作やケン栽培などにより、森林を切り開き点々と移動しているが、タイ政府はこれに対する政策として、植林や新しい村作りによる森林復元への懸命の努力を払っている。そのために、ヤオ族も徐々に定住化を余儀なくされ、平地民との接触がはじまり、彼らの生業形態に著しい変貌が見られるようになった。

衣生活においても例外ではなく、今回、3度目の調査では、特に男性は日常着に平地から購入したものを着用している者が増えていた。女性の場合は、それほど大きな変化は見られないものの、上衣・下衣のいずれかを平地民と同じスタイルにした者を各村で散見した。例えば、ブラウスやカーディガンを用いたり、あるいは、ヤオ族本来の上衣とタイ婦人の用いるパンツという巻きスカートを組み合わせるなどである。

このように、平地の町から新しい生活文化が導入され、衣生活面でも、容易に得られる既製服の便利さに馴らされた時、山地民族の長い歴史と伝統に支えられた民族服が、彼らの衣生活から消え去る日が来ないとは何人も保証することはできないであろう。今のうちに何らかの対策を講じない限り、その日の近いことが危惧される。筆者らは数回の現地調査を通して、この山地民族特有の衣裳が何とかしていつまでも伝承されることを願うものである。

最後に本研究を行うにあたり、助成をいただいた名古屋女子大学生生活科学研究所、そして御懇切な御指導を賜った岐阜大学教授中野刀子先生、名古屋女子大学名誉教授栃原きみえ先生及び資料を提供下さった国立民族学博物館、人間博物館リトルワールドの方々に対し深く感謝の意を表する次第である。

文 献

- 1) 岩田慶治：東南アジアの少数民族，日本放送出版協会(1971)
- 2) 村松一弥：中国の少数民族，233，毎日新聞社(1973)

- 3) 講談社編集部：世界の国・東南アジア I，講談社 (1975)
- 4) 野間吉夫：タイ民芸紀行，東出版 (1978)
- 5) 白鳥芳郎編：東南アジアの山地民族誌，161～191，講談社 (1978)
- 6) 白鳥芳郎：季刊民族学 4，97～103，国立民族学博物館 (1978)
- 7) 石井米雄：世界の民族 11，平凡社 (1979)
- 8) 松本敏子：世界の民族服，関西衣生活研究会 (1979)
- 9) カノミタカコ：染織と生活 30，90～93，染織と生活社 (1980)
- 10) 竹村卓二：ヤオ族の歴史と文化，弘文堂 (1981)
- 11) カノミタカコ：タイの国から愛をこめて，染織と生活社 (1982)
- 12) 金子量重編：民族と生活，50～60，学生社 (1982)
- 13) 平凡社：世界地図・世界の気候，12～13，平凡社 (1982)
- 14) 佐々木高明編：雲南の照葉樹林のもとで，228，241，日本放送出版協会 (1984)
- 15) 野口文子：衣生活 5，衣生活研究会 (1984)
- 16) 柴村恵子・織田恵子：名古屋女子大学紀要 27 (第 1 報) (1981)
- 17) 柴村恵子・織田恵子：名古屋女子大学紀要 27 (第 2 報) (1981)
- 18) 柴村恵子・望月照子：名古屋女子大学紀要 28 (第 3 報) (1982)
- 19) G. Young: The Hill Tribes of Northern Thailand (1969)
- 20) Alan R Randall: People of The Hills, 51～52 (1980)
- 21) J. S. Uberoi: From the Hands of the Hills (1981)